

### 「訳」立つ」

牧師 横山順一

先月十日、梅田のスカイビルで日本聖書協会による聖書事業懇談会が開かれました。新しい翻訳聖書、当初二〇一六年刊行予定でしたが、二年ばかり遅れるとのこと。どこまで進んでるのか気になったのと、「それでも新約聖書翻訳」との津村先生の演題が気に入って出かけて来たのです。

おおよそ百人くらいの聴衆だったでしょうか。当日結構な雨天だったことを思えば、大盛況と言っているのかも。

さて、今度の翻訳は、今まで以上に翻訳者の人選が多様です。単にカトリック・プロテスタント双方から、というだけでなく、カトリックだけ見ても、南山、聖カタリナ、上智、聖心女子・と多彩。

プロテスタントは、同志社、関学はもとより、青山学院、藤女子、東北学院、神戸女学院、東京神学大、早稲田・など。

これに筑波、東大、一ツ橋、広島などの国立大と聖公会・立教が

加わります。

翻訳は四段階の協議を以て進められていますが、特筆は、詩人や歌人、日本語科の教授らで構成する「日本語担当者」が置かれていることです。

神学者や牧師だけでは、用いられる単語に限界があるからです。どんなに原文どおりであっても、現代に通用しない言葉では意味がありません。或いは逆にそれを意識した意識が必要以上になったりもします。それをチェックするた

めの「日本語担当者」なのです。大阪夕陽丘学園の津村春英先生も新約担当の一人。同志社と聖学院で学ばれ、大阪日本橋キリスト教会の牧師です。幾つかの例を挙げながら進行状況を説明して下さいました。

ヨハネ福音書一章四節、現行新共同訳では、「言（ことば）の内に命があった」と訳されています。

ちなみに口語訳では「この言に命があった」、新改訳では「この方にいのちがあった」。岩波版では「彼において生じたことは、生命（いのち）であり」、田川訳では「それにおいて生じたものは、生命であった」とされています。

ガリラヤのイエシュエでは、「神さまの思いが凝って（こごって）あらゆる物が生まれ」となっています。

直訳すると「彼（言）において生じたものは、命であった」となります。

「彼」を「言」とするか、「神」とするか。「いのち」と表現するか、「生命」とするか「命」か。見た目だけでもずいぶん印象が変わるものです。聖書は役に立つ書物ですが、「訳に立つ」書物です。

是非、生き生きとした訳を作つて欲しいと願います。津村先生によれば、新約は今年中に、旧約があと二年ほどかかるとのことでした。二〇一八年が本当に楽しみです。

ことばは、まさしく「いのち」です。用いられる文字や言葉や表現で、全く別物になります。個人的には「美しさ」だけを追求せず、インパクトあるものを期待しています。

そもそも「聖書」は、神の「書物」でした。「神さまからのラブレター」と表した牧師がいました。翻訳作業のために、祈ります。「訳に立つ」本であるよう。